

フランスからみたアフリカ

——サルコジ大統領のダカールでの演説より

はじめに

二〇〇七年七月二六日、フランス共和国大統領ニコラ・サルコジがセネガルのダカールで演説を行った。同年六月に大統領に就任したばかりのサルコジは、最初のアフリカ外遊先として旧フランス領でありフランスとの関係が深いセネガルとガボンを選んだ。大統領となったサルコジの政治手法は、所属政党にとらわれず敵対政党である左派までも閣僚に任命するといった人事面での起用や、フランス第五共和制の仕組みを変えることにつながる憲法改正を打ち



加茂省三

出すなどのそれまでいわゆるタブー視されてきたことに挑戦するという「意外性」の演出にある。そのようなサルコジはこれまでの常識を打ち破るような改革案を矢継ぎ早に打ち出すことによって改革者としてのイメージをつくりあげ、フランス国内外から注目を集めた。アフリカに関しても、内相時代の二〇〇六年に訪問したベナンで「フランスとアフリカの健全で解放され対等な新しい関係」を唱え (*Le Monde*, 21 mai 2006)、大統領選挙戦中も前任者のシラクがド・ゴール時代から完全に同じ形態でないにしても継承してきたフランス語圏アフリカ諸国を重視する伝統的なアフリカ外交からの変革を訴えてきた (*Le Monde*, 14 février 2007 et 8 mai 2007)。それだけに最初の訪問地をそ

れら二カ国に選定したことは、期待を裏切ったことになったが、意外な選択であった。

しかしこの訪問国の選択以上に人々を驚かせたのは、サルコジがダカールで行った演説の内容であった。サルコジはこれまでの経歴からして経験上アフリカをよく知っているわけでもアフリカに親近感があるわけでもなかった。それでも、アフリカとの関係が深いフランスの共和国大統領としてのアフリカ観やアフリカとの関係の将来的な方向性に関して、アフリカ内外から注目が集まるのは当然であった。しかしその演説は、驚きを通り越して一部では怒りへとつながる内容であった。とりわけアフリカやフランスのアカデミックな立場の人々を中心に厳しい批判が引き起こされたのである。さらに演説の約一年後には演説原稿の起草者である、アンリ・ゲノ大統領特別顧問が『ル・モンド』紙上へ演説に関する弁明の内容を寄稿するといった事態まで発生することとなった (*Le Monde*, 27-28 juillet 2008)。

アフリカとの関係が緊密なフランスの歴代大統領による演説でこれほどの批判を浴びることはなかったのである。

いったいサルコジはいかなる目的をもってそのような内容をもつ演説をアフリカで行ったのであろうか。それはサルコジがまさに歴代の大統領が踏み込まなかった奴隷貿易や植民地支配といった歴史の問題に言及したことにある。サルコジは果敢にタブーに挑んだといえるのかもしれない

が、演説の内容からは歴史認識という問題を越えた、フランスのあるいはヨーロッパのアフリカ観に潜む根本的な問題が提起されることとなったのである。

そこで本稿では、ダカールでの演説、ならびに演説に対する批判を紹介することを中心に進め、フランスからみるアフリカを検証していきたい。

I ダカールでの演説

ダカール大学のシェイク・アンタ・ディオップ講堂で行われた演説は、サルコジがアフリカの若者たちに語りかけるといふ形式で進められた。したがって演説の内容は、いわゆる政治エリート層を対象にした政策的な内容を中心とするスピーチではなく、サルコジ政権のアフリカ観や、アフリカ・フランス関係の将来的な方向性が述べられることとなったのである。単なる政策スピーチではないこの演説からは、サルコジ政権のアフリカに対する見方を知ることができると考えられ、また、そうした見方を明示的あるいは暗示的に示すことは、フランス共和国大統領という立場で初めてアフリカの地で行う演説で果たすべき課題であったはずである。その点に対してサルコジの演説は応えることができるものであったといえる。これからその演説

の概要を紹介する。ただし、演説の内容の評価や問題点に關しては次章以降で取り上げることとしたい。なぜなら、このダカールでの演説が日本で大きく報道されていないことから、演説の内容が十分に周知されているとは考えにくい。そこでまず演説の内容を概説した後で、演説に關する批判を紹介したい。とりわけ演説からの引用が長く感じられるかもしれない。これは本稿が演説の一部を切り取った上で考察しているとの評価を受けることは本意であると考えることから、できるだけ演説の原文を掲載するほうが内容の客観的な理解に寄与すると考え、あえて引用文を多く掲載することにした。

演説はサルコジ政権によるアフリカ觀とフランス・アフリカ關係の将来的な方向性の大きく二つに分かれている。そこでまずサルコジ政権のアフリカ觀が述べられるが、最初の焦点はそのなかでもとくにフランスとアフリカの間に存在する長い歴史的な關係に關するものである。その歴史的過去に對してどのように向き合うのか、サルコジは次のように述べた。^{*1}

「私は過去を消すために来たのではない。なぜなら過去は消すことができないからである。私は過ちや罪を否定するために来たのではない。なぜなら幾度の過ちや罪が存在したからである。奴隷貿易があつた、奴隷

制があつた、男や女、子どもが商品として売買された。そしてこの罪はアフリカ人だけに對する罪なのではない。人間に對する罪であり、人道全体に對する罪であつた。……この黒い人間 (l'homme noir) の苦惱は、すべての人間の苦惱でもある。黒い人間の魂にある消えることのない傷は、すべての人間の魂にある消えることのない傷である。」

この奴隷貿易の罪に對して、サルコジは次のような態度を表明する。

「過去の世代によつて犯されたこの罪を償うことを現在の世代に要求することなどできない。父親たちの過ちを悔い改めるよう息子たちに要求することなどできない。アフリカの若者たちよ、私は悔いを述べるために来たのではない。私は奴隷貿易や奴隷制を人道に對する罪であると強く感じている、と言うために来たのである。私はあなたの方の別離や苦痛は私たちのであり、私のでもあると言うために来たのである。私は、アフリカ人とフランス人がそのような別離や苦痛を乗り越えて、お互いに見つめ合うことを提案するために来たのである。」

フランスがアフリカで行った過去の過ちは奴隷貿易だけでも、奴隷貿易で終わったわけでもないのは明らかであり、次に植民地支配へと演説は進んでいく。サルコジは、植民地支配に関して、アフリカを征服したこと、植民地主義者がアフリカやアフリカ人の植民地化以前の過去を否定し、欧州と比べて劣等的なイメージを作り上げ、アフリカ人の尊厳を無視したことが過ちであったとする。そして、次のように述べたのである。

「植民地主義者が来て、植民地主義者たちのものではない資源や富を奪い、利用し、搾取し、だまし取った。植民地主義者は植民地化された人々から人格、自由、土地、成果、労働を奪った。植民地主義者は奪ったが、私は植民地主義者はまた与えた、と敬意をもって言いたい。植民地主義者は橋を、道路を、病院を、診療所を、そして学校を建設した。植民地主義者は手つかずの土地を豊かにし、苦勞し、労働し、知恵をつかった。すべての植民者が盗人ではなく、すべての植民者が搾取者ではない、とここで私は言いたい。植民者のなかには悪い人間もいたと同時に、良い志をもった人間もいた。そのような人たちは文明化の使命を達成することを考えていた、善を行うことを考えていた。……植民地化が現在のアフリカにおけるすべての困難に責任

を負っているのではない。植民地化はアフリカ人同士で行われている血なまぐさい紛争に責任を負っているのではない。植民地化はジェノサイドに責任を負っているのではない。植民地化は独裁者に責任を負っているのではない。植民地化は狂信主義に責任を負っているのではない。植民地化は腐敗や汚職に責任を負っているのではない。植民地化は浪費や環境汚染に責任を負っているのではない。しかし植民地化は大きな過ちであった。……植民地化は大きな過ちであったが、この大きな過ちは共通の運命への萌芽を産み出した。この考えはとりわけ私の心を掴んでいる。植民地化はヨーロッパとアフリカの運命を変え、それらの運命を混ぜ合わせた。そしてこの共通の運命はヨーロッパにおける戦争で犠牲となったアフリカ人兵士の血で確固たるものとなった。……良くも悪くも、植民地化がアフリカの人々とヨーロッパの人々を変化させたのである。」

サルコジが用いた「共通の運命」という言葉は、植民地化がアフリカをグローバルな世界に統合させた、との意味合いがあると考ええる。ここから演説では、アフリカの人々、とりわけアフリカの若者たちにグローバルな世界の一員としての責務が説かれる。まずサルコジは原理主義に代表さ

れる狂信的な行為に傾倒することへの警鐘を鳴らし、アフリカの文明に誇りを持つことを諭した。その上でサルコジは現在のアフリカの問題点を次のように語った。

「アフリカの惨劇はアフリカの人間 (l'homme africain) が歴史のなかへ十分に入っていない、ということである。アフリカの農民は、数世紀にわたり季節にあわせて暮らし、その理想的な生活とは自然との調和であり、同じような行為と言葉の終わりにき反復によってリズムが刻まれる時間の永久的な繰り返しのみしか認めていない。常にすべてが反復されるという想像の領域では、人間による冒険や進歩的な考えのための場所が存在しない。自然がすべてを指揮するそのような世界では、人間は近代の人間を苦しめている歴史の苦悩を免れている。しかし、その人間は、すべてが予め書き記されているような不変の秩序の只中で停滞している。そこでは人間が未来に向かって突き進むようなことは決していない。その人間が運命を自ら思い描くために繰り返しから脱出するという考えにいたることは決していない。アフリカの一人友人がそのことを言うのを許してほしいが、アフリカの問題とはそこにある。アフリカの挑戦とは、なによりもまず歴史のなかに入ることである。」

アフリカの挑戦に関して、サルコジは次のように続ける。

「アフリカの挑戦とは、自分もまたあらゆる文明における普遍的なすべての継承者だと自覚することを学ぶことである。それは、人権を、民主主義を、自由を、平等を、正義をあらゆる文明と人類に共通の遺産として学ぶことである。それは、近代科学技術を人類の知的な生産物として学ぶことである。……文明は偉大な人間精神の混血へ加わる程度に応じて大きくなる。アフリカの弱さは、アフリカ内では多くの輝かしい文明を知りつつも、長期間にわたりその偉大な人間精神の混血へ十分加わることがなかったことである。」

そこでサルコジは、自らの歴史観やアフリカ観を織り交ぜながらアフリカの若者たちを次のように鼓舞する。

「アフリカの若者たちよ、伝統の名においてアフリカを歴史の外においておこうとしている人々のいうことを聞いてはいけない。なぜなら、これ以上何も変わらないアフリカであるなら、それは隷属の状態にあると再度非難されるかもしれないとの理由からである。アフリカの若者たちよ、あなた方を根無し草にしようと

する人々、あなた方のアイデンティティを剥奪しようとする人々、アフリカ的事であること、つまりアフリカの神秘的なことですべてを、アフリカの信仰のすべてを、アフリカの感性のすべてを、アフリカの精神構造のすべてを一掃しようとする人々のいうことを聞いてはならない。なぜなら、意見をやりとりするためには何か与えるものをもっていなければならないし、他者と話すためには何か発言することをもっていなければならないからである。」

さらにサルコジはサンゴールを引用して、アフリカが他の世界の幼年期であるとするアフリカ観を提示するのである。

「(サンゴールの)詩は、象徴の森を越え、父祖伝来の記憶の泉に遡る。各人は、大人が心の奥底に幼年時代の幸せな思い出を持ち続けているように、意識の奥底に父祖伝来の記憶を持ち続けている。なぜなら各人が現在の永遠の時を知っていたからである。各人は全人類を支配することではなく、全世界と調和して生きることを探求している。感覚、本能、直感の時間、密儀とイニシエーションの時間、神秘的あるいは神聖な時間がいたる所にあった。そこでは、すべてが奇跡であ

り調和であった。それは魔術師、魔法使い、シャマンの時代である。偉大な口頭伝承の時代である。なぜなら口頭伝承は何世代にもわたり尊重され繰り返され、幾世紀にもわたって神々についての古き伝説を伝えてきた。アフリカはすべての大地の人々に、同じ幼年時代を共有していたということを改めて思い出させる。アフリカはそこから単純な喜び、つかの間の幸運と必要とされること——ここで必要とされることは、理解するよりも信じること、思考するよりも感じること、支配するよりも調和することであるが——それらと呼び覚めたのである。」

そしてアフリカ・ルネサンスという言葉が用いられる。サルコジはいまだに神話化された過去に固執し、その呪縛から解き放たれていないことが、アフリカが現実を直視できない原因とする。サルコジは、そのような神話からの解放がアフリカを成功に導くとし、その解放をアフリカ・ルネサンスと呼称するのである。ここからサルコジは移民問題および頭脳流出の問題に言及し、アフリカの若者たちにアフリカで成功することを目的にするように説く。そして、フランスとアフリカの関係を次のように述べる。

「アフリカが望むことはフランスも望むことである、

それは対等な権利と義務を有する国家同士の協力、協同、パートナー関係である。アフリカの若者たちよ、あなた方は民主主義を、自由を、正義を、法を望むであらうか。それを決めるのはあなた方である。フランスはあなた方の領分を侵すつもりはない。それでも、もしあなた方が民主主義、自由、正義、法を選ぶのであれば、フランスはそれらをつくり上げるためにあなた方と協同するであらう。……あなた方は、より人間性豊かな、より正義に満ちた、より規制された、現在の姿とは異なるグローバリゼーションを望んでいる。フランスもまたそのようなグローバリゼーションを望んでいる、と私は言いたい。フランスはヨーロッパとともに闘うこと、アフリカとともに闘うこと、世界中でグローバリゼーションを変化させることを望んでいるすべての人々とともに闘うことを望んでいる。しかし我々はあなた方に干渉することはできない。……あなた方は恣意的な行為や汚職、暴力をやめることを望んでいるか。もしあなた方がそれを望むのであれば、フランスはあなた方の味方となってそのことを要求するが、干渉はしない。……あなた方はアフリカの統一を望むのか。フランスもまたアフリカの統一を希望する。……フランスがアフリカとともに行いたいこと、それは現実を直視することであり、もはや神話の政治

ではなく現実の政治を行うことである。フランスがアフリカとともに行いたいこと、それは共同发展、つまり共有された発展である。……フランスがアフリカとともに行いたいこと、それはグローバリゼーションにおける共通の戦略を磨くことである。フランスがアフリカとともに行いたいこと、それはフランスとすべてのヨーロッパでアフリカの若者が尊厳と尊敬を持って受け入れられるために、フランスとアフリカが一緒に交渉し決定した移民政策である。……フランスがアフリカとともに行いたいこと、それはユーラフリカの到来を準備することであり、その偉大な共通の夢はヨーロッパとアフリカで待望されている。」

このようにサルコジは、ユーラフリカという言葉を用いてヨーロッパとアフリカの一体性を主張し、アフリカの特殊性ではなく世界の一部としての存在するようになることが未来へのメッセージとなるとして演説を終了したのであった。

II 誰に向けての演説か

これまで見てきた演説の内容に対して、アフリカおよび

フランス国内から数々の批判が起こることとなる。批判の多くは、アフリカ観に関するものであるが、これからそれら批判の一部を参照しつつ、演説の問題点を整理し、考察を行いたい。ただしここでは演説に対する批判すべてを網羅的に紹介することは物理的にも不可能であるし、批判の目録をつくることはこの目的ではない。また、批判のなかには、サルコジの演説にはフランス大統領府のウェブサイトに配布されたのとは別版があり、その別版の原稿には書かれていたがサルコジが実際に演説では読み上げなかった箇所があるといった指摘がある（Gassama 2008）^{*3}。それは、事前に報道機関に配布された版では「アフリカ人を奴隷商人に売ったのは他のアフリカ人である」と記されていたが、実際の演説のなかではサルコジの口からそのような箇所は発せられなかったというものである。演説の後には該当する記述はない。そのような内容を発言しようとしていたこと自体が大きな問題であることに違いないが、実際には発言されていないのであるから、ここではこの点に関して批判がなされていることを指摘するだけにとどめたい。

また、ここではサルコジの演説を対象とするが、サルコジ自身のパーソナリティのみを対象にすることは必ずしも適当でないと考える。確かに批判のなかには演説の内容を

サルコジや演説の起草者であるゲノ個人の問題として扱うものもあるが、それでは問題を矮小化させてしまうことにつながる^{*4}と考える。なぜならサルコジやゲノの個人的なパーソナリティが問題ならサルコジ、ゲノの個人が問題になるのであって、もちろんサルコジはフランス共和国大統領でありゲノは大統領特別顧問というフランスのアフリカ外交に大きな影響を与えることのできる高い地位にある人物たちであるが、個人の問題に収斂させてしまえばサルコジやゲノを例外的な人物とすることで問題の解決をはかることが可能になってしまうからである。それではこの演説に内包するフランス・アフリカ関係に広くかわる問題を看過することになる。もっともサルコジのパーソナリティにまったく問題がないとはいえない。サルコジは二〇〇五年五月から二年間内相を務めたが、同年一月にパリ近郊で暴動が発生した際には、移民系の若者たちを対象に「クズを片付けろ」と呼びメディアに大きく取り上げられると、予定されていた小アンティル諸島に点在するフランス領への訪問がキャンセルされ、批判の的となった（*Le Monde*, 9 décembre 2005）。また二〇〇六年五月にはアフリカ諸国歴訪でマリとベナンを訪問したが、移民の選択を柱とする新しい移民政策を規定する法案の議会での採決と期間が重なったこともあって、ベナン市民がサルコジの訪問に抗議し、ベナン議会の議員たちが、フランス側主催

の昼食会をキャンセルするという事態も生じた。議員たちはサルコジを、「アフリカの友人ではない」と切り捨てた(*Le Monde*, 19 mai 2006)。ベナン訪問の件はサルコジがスケープゴートにされたという面があるにしても、サルコジが大統領に当選した際、アフリカからは失望の声が上がったことは事実である(*Le Monde*, 06 mai 2007)。

さて、演説への批判はアフリカ観に関するものが多く提示されたが、まずこの演説の問題点はアフリカの若者たちに語りかけるという形式そのものにあつたと考えられる。それは演説が「父権主義(paternalisme)」に満ちているというものである。たとえば、『ポリテイク・アフリケーヌ』誌(*Politique africaine* 2007: 6)は、演説を「父権主義

的であり極端な啓蒙的傾向がある」とし、「このような調子で演説する西欧の指導者は他にはいない」と批判する^{*5}。確かに演説の形式を鑑みれば、起草者のゲノが擁護するようにアフリカの若者たちに呼びかけるという形式である以上(*Le Monde*, 27-28 juillet 2008)、ある程度父権主義的な調子になるのは仕方がないのかもしれない。しかし、それ

ではなぜ若者たちに語りかけるという形式をとったのか。この点に関してゲノは何も述べていない。おそらく移民問題や未来志向の関係構築という演説の狙いからして、若者に語りかけるという形式が妥当と考えたに違いない。それでも演説を聴くのは若者だけではない。若者に対して語る

サルコジを聴いている若者ではないアフリカの人々が多くいるということは意識されなかったのであろうか。

演説のさらなる問題点は、若者以外のアフリカの人々を意識していなかったにとどまらず、そもそもアフリカの人々に顔を向けて語りかけているのではないと指摘できることにある。演説の内容はフランス国内を意識しており、フランス国内の文脈を踏襲したものであった。それは奴隷貿易、奴隷制および植民地支配に関する発言から明らかである。確かに『ポリテイク・アフリケーヌ』誌(*Politique africaine* 2007: 7)が指摘するように、これまでのフランス第五共和制において奴隷貿易や植民地支配に対する批判を明確に行つた大統領はいなかった。演説では奴隷貿易、奴隷制および植民地支配の「誤り」が認められた。しかし奴隷貿易と奴隷制に関しては、過去の世代が犯した罪に対して謝罪する意思是示されず、むしろ人類全体に対する人道の罪との認識が示された。植民地支配に関しては、すべてを否定するのではなく、植民地者のなかには「良い志」をもったものもいたという積極的な側面が強調された。

奴隷貿易と奴隷制に関しては、二〇〇一年五月一〇日にフランスの上院議会であるセナで「奴隷貿易および奴隷制を人道に対する罪として承認する法」(通称「トビラ法」)が可決されたことから、奴隷貿易と奴隷制が人道に対する罪であるという位置づけが確立されている^{*6}。また、同年八

月三一日、九月七日に南アフリカのダーバンで国連主催の「人種主義、人種差別、外国人排斥および不寛容に反対する世界会議」では、会議に参加したアフリカ諸国から奴隷貿易に対する謝罪と賠償が要求された。その際にトビラ法がアフリカ諸国から好意的に評価される場面もあったようであるが (*Le Monde*, 8 septembre 2001)、トビラ法では謝罪にも賠償にも触れられていない。結局、会議では、奴隷制と奴隷貿易が人道に反する罪であるということが認められ、現在もなお奴隷制やそれと同類のことが行われていることを非難する内容の最終宣言が出されたにとどまり、アフリカ側が求めた謝罪や賠償は実現されなかった。サルコジの演説はこの流れを踏襲している。

植民地支配に関しても、フランス国内の動きを踏まえての発言であったと見ることができ。それは「帰還フランス人の国籍および国家への貢献を認める」二〇〇五年二月二三日法である。^{*8} この法律に対してフランス国内の歴史研究者から反発の声が上がった。二〇〇五年二月二三日法の第四条には次のように記されていた。

「大学の研究プログラムは、海外領土でのフランスの存在、とりわけ北アフリカにおけるフランスの存在の歴史にふさわしい地位を与える。

学校教育のプログラムは、とくに海外領土でのフラ

ンスの存在、とりわけ北アフリカにおける存在の積極的な役割を認め、海外領土出身のフランス軍兵士の歴史と犠牲に、それら兵士の権利である高い地位を与える。」

歴史研究者たちはこの「公式な歴史」の教育に拒否を訴えた (*Le Monde*, 25 mars 2005)。二〇〇五年一月三〇日に野党社会党が第四条の廃止をめざす法案をフランス国民議会に提出したが、サルコジが党首を務める与党国民運動連合 (UMP) の反対で法案は審議されることはなかった。とりわけサルコジは、社会党の態度を「永遠の懺悔」として非難し、法案反対に主導権をとった。これでは事態は収束せず、むしろ第四条に反対する動きは研究者のレベルを越え、フランス領アンティールやアルジェリアでデモが繰り広げられるといった社会的なうねりとなる様相を呈する。そのためシラク大統領 (当時) が事態收拾に動いたが、第四条の削除にまでなかなか決断ができなかった。シラクが決断したのは年が明けた二〇〇六年一月二五日のことであつた。シラクの要求に応じて憲法評議会が開催され、議会で議論されることなく第四条の第二段落 (「学校教育の……高い地位を与える」) が削除されるという異例の対応となった。それは議会での審議が期待できなかったことによる。

それではサルコジが何故に抵抗したのであろうか。それは選挙対策という要素が大きいと考えられる。二〇〇二年の大統領選挙の際、フランスを震撼させたのは、大統領選挙第一回投票の結果、第一位はUMP候補のシラクであったが、第二位は大方の予想に反して社会党候補のジョスパンではなく、極右政党国民戦線のル・ペンであった。結局第二回投票でシラクがル・ペンに勝利して大統領に再選されることになるのであるが、ル・ペンが第二位につけたことは世論を驚かせた。とりわけ危機感を募らせたのは保守政党である与党UMPであった。自分たちの票が移民排斥などを声高に主張する極右勢力へ流れていくことを心配したのである。これ以降、シラク政権および与党UMPは極右への票の流れを意識しナショナリスト色の強い政策をとるようになる。たとえば二〇〇四年に「公立学校における宗教的シンボル禁止法」（通称「スカーフ禁止法」）が成立したのもそのような背景がある。二〇〇五年二月二三日法も同様の文脈で成立した。さらにサルコジは大統領選挙期間中の二〇〇七年四月五日にリオンで次のように述べている。^{*}

「我々はフランスを、フランスの歴史とアイデンティティをあまりに悪く言われるがままにしておくのは間違っている。私はフランスとフランスの歴史への嫌悪

を表明することで懺悔するというやり方を嫌悪する。私は自分たちの国を誇りに思うことを我々に禁じさせようとする懺悔を嫌悪する。」

サルコジのダカールでの演説はこの延長線上にあるのである。これではサルコジの演説にアフリカの聴衆が納得するとは考えられない。たとえばマリの元文化大臣であるアミナタ・トラオレは、『侮辱されたアフリカ』と題された著作のなかで次のように述べている (Traore 2008: 45-46)。

「なぜ奴隷貿易や植民地支配の遺産の重荷を背負い込まなければならぬのであろうか。それよりも自分で勝手に許したり、自分で勝手に賞賛したり、『アフリカの人間』はフランスによって成し遂げられた文明的な成果に対して礼を言わなければならないと思わせるほうがずっとよい。『人質の学校 (école des otages)』は入植者が必要とする補助者を育成することを目的としていたことや、フランス本国を豊かにすることになる未開の土地を肥沃にさせるために、我々が額に汗して時には血の代償を払ってインフラストラクチャーを建設したことを忘れるよう、我々は促されているのである。」

Ⅲ 歴史なきアフリカと悪しき二分法

演説では歴史に関して、奴隷貿易や奴隷制、植民地支配にとどまらず展開されている。とりわけサルコジが、アフリカの人間が歴史のなかへ十分に入味っていない云々と発言したことは、奴隷貿易、奴隷制、植民地支配に関する解釈よりも世論を驚かすことになった。「アフリカの人間」という表現自体もまた問題視されたのであるがその点は後述することにして、歴史のなかへ十分に入味っていない云々との発言から、ヘーゲルの歴史観の再来であるとする批判が提示されたのである (Chrétien 2008: 18-19; Politique africaine 2007: 6)。それはヘーゲル (1994: 157-160) が次のように記したことが想起されるとの指摘であった。

「……アフリカは、歴史的にさかのぼれるかぎりでは他の世界との交渉をもたない閉鎖地帯です。内部に引きこもった黄金の地、子どもの国であって、歴史に目覚める以前の暗黒の夜におおわれています。……アフリカの特徴をとらえるのは困難ですが、というの、ここでは、私たち（ヨーロッパ人）がものを考えるときつねに必要なとする一般概念を、すててかからねばな

らないからです。黒人の特徴といえば、その意識がなんらかの確固たる客観性を直観するにいたっていないことが、まさにそれで、人間の意思が関与し、人間の本質を直観させてくれる紙や法律が彼らのものにはない。アフリカ人は、個としての自分と普遍の本質としての自分との区別を認識する以前の、素朴で内閉的な統一のうちにあって、自己とはべつの、自己より高度な絶対の実存についてはまったく知ることがありません。……黒人は自然のままの、まったく野蛮で奔放な人間です。彼らを正確にとらえようと思えば、あらゆる畏敬の念や共同精神や心情的なものをすてさなければならぬ。彼らの性格のうちには人間の心にひびくものがないのです。」

ジャン・ピエール・クレティアン (Chrétien 2008: 18-19) が指摘するように、このヘーゲルのアフリカ観は植民地主義的思考の典型である。サルコジの演説からは植民地の問題を過去のものとする意図がうかがわれるが、皮肉なことに演説そのものに植民地主義的な調子が醸し出されてしまったのである。もちろん、演説で歴史のなかへ十分に入味っていない云々という箇所は、けっして植民地支配を想起させるという意図が起草者にあったのではないであろう。起草者であるゲノは、大統領はヘーゲルから何も得て

いない、と振り返る (*Le Monde*, 27-28 juillet 2008)。確かに演説はヘーゲルから直接引用していない。さらにゲノは、アフリカに歴史がないとはどこにも言っていない、とし、アフリカの人間は歴史のなかや世界のなかに入っているが十分ではないといったのであって、どうしてこれが歴史の否定につながるのか、とも述べている。確かにヘーゲルは、そもそもアフリカは歴史に目覚める以前の状態だとしている。

それでは、ゲノはなぜ「歴史 (*histoire*)」という言葉を単純に用いたのであろうか。この点に関してゲノは言及していない。むしろ、ゲノは二〇〇八年四月九日付でセネガルの日刊紙『ル・ソレイユ』の社説欄に著名なアフリカ人ジャーナリストであるバラ・ディウフが、我々の扉をたたく今世紀は我々が現代史 (*histoire contemporaine*) へ入ることを要求している、と記したことを引用して正当化している。しかし「歴史」と「現代史」では意味合いが異なることには気付いていないようである。バラ・ディウフからは、アフリカがもっと現代世界が直面する課題に関与すべきとのメッセージとして受け取れる。それが、「歴史」という言葉を単純に用いて、人間が歴史のなかに十分入っていない、となると、その人間はどのような状態なのか考えさせられる。ここで想起されるのが再びヘーゲルである。ヘーゲルは、歴史に目覚める以前の状態のアフリカの人々

(ヘーゲル曰く「黒人」) が、自然のままのまったく野蛮で奔放な人間である、という。つまり歴史のなかに十分入っていないとは、自然のままのまったく野蛮で奔放な人間から抜け出しきれないという意味合いを持つことになるのである。

この点こそが演説に潜む注目すべき問題点である。つまり、アフリカは「未開」あるいは「幼稚」であるとの意識がいまだに存在していることの現れである。この点を明白に批判するのは、クレティアンである。クレティアン (*Chrétien* 2008: 21) は演説のなかからそのような意識を読み取ることのできる言葉を指摘する。「神秘的な教義 (*foi mystérieuse*)」「アフリカの魂 (*l'âme africaine*)」「超自然的な想像の領域 (*un imaginaire merveilleux*)」「先祖伝来の賢明や (*une sagesse ancestrale*)」「自然との共生 (*la symbiose avec la nature*)」「不変の秩序 (*un ordre immuable*)」「失われた楽園 (*un paradis perdu*)」といった言葉を抜き出したクレティアンは、演説がアフリカをヨーロッパの幼年時代と結論づけているとする。さらにクレティアン (*Chrétien* 2008: 21-22) は演説のなかで、伝統と退嬰主義という檻に閉じ込められたアフリカの人たちが西欧モデルへの入会によってのみ変化と進歩をみいだすことができる^{*10}とされているとし、伝統と近代とは、別の言い方では、原住民と文明化の使者の対立であり、この構造的

な二元論がダカールの演説の核心である、とする。実際にゲノは、ヨーロッパ以外の文明に進歩という要素がないといたいのではないが、我々が知っている進歩というイデオロギーは啓蒙の時代からの遺産に固有のものである、としている (*Le Monde*, 27-28 juillet 2008)。ここからゲノが二元論から解放された思考の持ち主でないことは明らかである。

さらに、この二元論の背後には人種主義 (racisme) があるとの主張がある。演説で用いられた「アフリカの人間」や「黒い人間」という表現が人種主義的であると指摘されている。また、演説の様式それ自体を人種主義的とする批判がある。たとえば、アシル・ベンベ (Membre 2008: 117-119) は、一七八八年にフランスで設立された「黒人友好協会 (Société des Amis des Noirs)」のメンバーが、奴隷制や奴隷貿易に苦しむ黒人に同情する、つまり黒人の友人として好意を抱きながら行動しつつも、黒人を劣等視するという人種的偏見からは解放されていないとする^{*11}。そしてそのメンバーにとって、黒人とはいにしえの幸運で単純な人間性の生きた象徴である。このようなレッテルは植民地統治下でも継承され、黒人たちは森に住み泉で歌を歌いながら自然や魂と調和して生きていとされた。ベンベはここにサルコジの演説との類似性をみいだすのである。そしてベンベ (Mbembe 2008: 121) は、サルコジがアフリ

カ人の「友人」として植民地支配を「誤り」と表現することとで非難しても、演説の構造は「人種主義者の原型 (Proto-racist)」そのままである、と断言する。このアフリカ人を劣等視する人種主義は何も奴隷貿易や植民地支配といった過去とダカールでの演説に限定されることではない。クレティアン (Chrétien 2008: 19-29) は、現在のフランスのメディアでも、アフリカは常に「神秘的」で「冒険」の対象として紹介されているとし、ヨーロッパの文化の深淵には人種主義という側面が潜んでいるという。そしてベンベ (Membre 2008: 106) は、サルコジの演説が、アフリカのことを問題にするやいなやフランス風人種主義ともいえるべきものが機能するという流儀の最も公的な証言になっている、とするのである。

こうした人種主義との批判は、演説起草者であるゲノにとって最も耐え難いものであったに違いない。『ル・モンド』紙に掲載されたゲノの反論では、人種主義との批判に対して多くの紙面が割かれていた (*Le Monde*, 27-28 juillet 2008)。ゲノはまず、人種主義とは人間集団を遺伝形質の質に基づき階層化し、上位の人間集団が下位の人間集団に対する特権を正当化すること、とのレヴィ・ストロースが一九七一年にユネスコで行った「人種と文化 (Race et culture)」と題する講演のなかで展開した人種主義の概念を引用する。そしてゲノは演説ではそのような階層化は行

われていないとするのである。さらにゲノは、戦後の対独和解に貢献した哲学者エマニュエル・ムニエが、自然との調和をアフリカの幸福と推測する箇所を引用し、またアナール派の歴史学者フェルナン・ブローデルが、アフリカは外界から閉ざされた存在と述べている箇所を引用して、ムニエやブローデルを人種主義者と呼ぶのか、と問いかけている。

このゲノの反論は的外れといわざるをえない。レヴィ・ストロースによる定義はもつともであるし、演説のなかで階層化が行われていないのも確かである。しかし、問題は演説のなかで具体的に階層化されていたか否かではなく、アフリカを劣等視する意味を想起させる表現や語句が演説に含まれていたことにある。そしてムニエやブローデルを人種主義者と呼べるのかという問いかけは、いいかえればサルコジ個人を人種主義者と呼ぶのは誤りであると言っているようなものである。確かに批判のなかにはサルコジへの個人的なものが存在する。しかし、問題の本質はサルコジ個人の資質を問うことにあるのではない。ペンベが指摘するように、サルコジ演説が明らかにしたことはフランスがアフリカを語るときに人種主義的な呪縛から二一世紀の現在になってもいまだに解放されていないということである。それはつまりジャン＝フランソワ・バイヤール (Bayart 2008: 31-34) が指摘するように、「断絶がない」

a pas rupture)』のである。バイヤールは、サルコジもたびたび引用するヴィクトル・ユゴーが、一八七九年に残した『アフリカについての演説 (Discours sur l'Afrique)』を引用する。

「よあ人々よ。その土地を奪取せよ。その土地を奪え。誰のためにか。誰のためではない。神のためにその土地を奪うのだ。神がその土地を人間に与えるのだ。神がアフリカをヨーロッパに与えるのだ。その土地を奪え」 (Hugo 1926: 128)。

奴隷貿易および奴隷制を人道主義的な立場から批判し続けたヴィクトル・ユゴーですら、その範疇から逸脱する人物ではなかった。さらにこの後、植民地拡大の重要性を主張し、むしろ植民地住民に対して親近感を抱いていたと評されているジュール・フェリーでさえ、人権宣言は赤道アフリカの黒人のために書かれたのではない、と断言し、優等人種は劣等人種を文明化する義務がある、と主張したのである (Manceron 2006: 60-61)。そして、アフリカ植民地が独立を迎えても、フランスはまだ植民地主義的あるいは帝国主義的な要素を色濃く残した関係をアフリカと構築しようとした。それが「フランサフリック (Françafrique)」なる用語で特徴づけることのできるフランスと旧フランス

領アフリカ諸国を中心としたフランス語圏アフリカ諸国との関係なのである。^{*15} ウフェールボワニによつてフランス(France)とアフリカ(Afrique)からつくられた造語であるフランサフリックは、その用語の持つフランスとアフリカの一体性という意味合いが、独立後もなお植民地時代のようにフランスに大きく依存するアフリカと、アフリカという勢力圏を有することで国際的な大国たらしめる帝国主義的思考に囚われ続けるフランスという、両者の関係を象徴的に示している。フランサフリックもまた過去との断絶ではなかった。大統領選挙戦ではこのフランサフリックの改革を訴えたサルコジであるが、結局はサルコジもまた断絶できていないことがこのダカールの演説で露呈してしまつたことは皮肉なことである。

おわりに

ここまでサルコジがダカールで行つた演説の内容と演説に対する批判を見てきた。ゲノが反論するようにサルコジは演説のなかで明白にアフリカに対して人種主義的な発言を行つたわけではなく、また二元論的発言もアフリカを劣等視することを主たる目的として発言したのではないであろう。実際にサルコジの演説はアフリカ諸国との間で外交

問題化していない。それどころか南アフリカのタボ・ムベキ大統領(当時)のように、二〇〇七年七月二日付けサルコジ宛の親書のなかで演説に対して謝意を表明した指導者もいる。^{*16} もっとも公式に非難することはなかったにせよ、AU委員長のアルファ・ウマール・コナレのように、サルコジの演説に対して違和感を表明した指導者もいたことは指摘しておかなければならない(Chrétien 2008: 23)。

サルコジの演説に対する批判はアカデミックな立場から中心に展開されたのであるが、そのアカデミックな立場にしても、サルコジの演説すべてを否定しようとの意図はないと思われる。たとえばクレティアン(Chrétien 2008: 25)は、父権主義的、二元論的、人種主義的な要素が、演説の他の箇所に見ることができると善意を相対化させ失墜させた、としている。むしろ演説において問題であることは、サルコジおよびゲノが意図的に父権主義的、二元論的、人種主義的な演説を行おうとしたか否かではないのである。

ベンベ(Mbembe 2008: 126)が批判するように、演説における言葉の使い方が鈍感すぎるのであり、言葉の表面的な名称だけを意識して意味をよく考えずに使つたことが問題なのである。演説の最後で提唱されたユーラフリックにしても、それがフランスが第四共和制下で植民地体制の維持を意図して用いた用語ゆえに、フランスとアフリカとの新しい未来を切り開く言葉との印象を持たせることができる

のかは疑問である。この点に関しては、『ポリティーク・アフリケース』誌 (Politique africaine 2007: 6) が指摘するように、サルコジの腹心とはいえ、アフリカ問題に精通しているとはいえないゲノを演説の起草者にしたこと、そしてその演説原稿に対してフランス政府内のアフリカ問題担当者が意見を言うことはなかったのか、といったことが疑問に感じられる。

その一方でサルコジにこのような演説を許してしまったのは、「アフリカ悲観論 (アフロ・ペシミズム)」の蔓延という社会的な背景があるのではないであらうか。確かにここ数年の国際的な資源価格の高騰により、アフリカの経済は上向いている。しかし、その資源価格の高騰という恩恵に与ることのできるアフリカ諸国は限られており、恩恵に与ったからといって問題が解決されているわけではない。アフロ・ペシミズムが蔓延している例として、ステファン・スミスが二〇〇三年に発表した『ネグロロジー (Negrologie)』をあげることができであろう。そのなかでスミスは、現在のアフリカの苦悩の原因がアフリカの人的貧困や後進性に基づく文化に原因があるとし、人種主義的な視点を提示したのである。スミスは長きにわたりフランスの『リベラシオン』紙や『ル・モンド』紙の記者としてアフリカで取材を続け、アフリカに好意的な第一線級のジャーナリストとしてフランス、アフリカ双方で評価を

得てきた人物であった。それだけにこの『ネグロロジー』の内容は驚きを持って迎えられ、賛否両論が起ったのである。もちろん『ネグロロジー』が直接サルコジの演説に影響を与えたわけではないが、アフロ・ペシミズムの蔓延が演説の言葉の選び方に影響を与えたと考えerことはできよう。

サルコジは二〇〇八年二月に二回目のアフリカ外遊として南アフリカを訪問した。南アフリカ滞在中の二月二八日にケープで行った演説はダカールの演説と異なり、政策的な内容を持つものであった。^{*14}とりわけフランスと旧フランス領アフリカ諸国との間で締結された安全保障分野に関する二国間協力協定の見直しに言及されたことが注目された。なぜなら、この安全保障に関する二国間協力協定は、フランスと旧フランス領アフリカ諸国の深い結びつきを象徴するものであり、フランサフリックを公的に担保するものでもあるからである。しかもフランス第五共和制の歴史的政権でこの安全保障に関する二国間協力協定の存続が問題にされることはなかった。

しかしこれまでのところ、この二国間協力協定の見直しに関しては進展がない。サルコジが大統領選挙期間中に訴えてきたアフリカ外交の改革に関して進展はないのである。むしろサルコジは改革とは反対の方向に進んでいるように思える。たとえばフランス政府内部でフランサフリッ

クとの決別を強く主張したジャン＝マリー・ボッケルは、二〇〇八年三月の内閣改造の際に協力・フランコフォニー担当相から更迭された^{*15}。またサルコジは旧来のアフリカ外交で暗躍していたロベール・ブルジ弁護士と接触している。さらにチャドのデビー政権との不透明な関係が指摘されている (*Le Monde*, 13 mars 2008)。

こうしたことからアフリカではなく、サルコジのアフリカ外交こそまさに停滞とよぶにふさわしい状況である。サルコジ政権のアフリカ外交の中心的な目的としては経済的な実利優先という観点から資源外交があり、アンゴラなどの産油国との関係改善・強化に力が注がれている。しかしこれはアフリカが依然として原料供給地にしか見なされていないこともまた示しているのである。資源確保という行動を単純に新植民地主義と批判することは適当ではないが、そこにアフリカと未来に向けた新しい関係を築くという観点からの新しさがなく指摘することはできると考える。もともとそのような新しさは、依然として潜在的に存在するオリエンタリズムの克服なくしては到来することがないのかもしれない。過去の亡霊のように現れたサルコジのダカールでの演説をみると、フランスのアフリカ外交、そしてフランサフリックの根本的な転換にはまだしばらく時間がかかることになろう。

●注

*1 サルコジの演説はフランス大統領府のウェブサイトで引用 (www.elysee.fr/download/?mode=press&file_name=disc-sarko-universite_dakar-26-07-07.pdf) (二〇〇八年一〇月三〇日)。

*2 大澤 洋 T. Heams, «L'Homme africain...», *Libération* (France), 2 août 2007; A. Membre, «L'Afrique de Nicolas Sarkozy», *Sud Quotidien* (Dakar), 2 août 2007; I. Thioub, «Lettre à M. Nicolas Sarkozy», *Le Matin* (Dakar), 7 septembre 2007; Raharimanana, B. Boris Diop et al., «Lettre ouvert à Nicolas Sarkozy», *Libération* (France), 10 août 2007; C. Coquery-Vidrovitch, G. Manceron, B. Siona, «La mémoire partisane du président», *Libération* (France), 13 août 2007; F. Brisset-Foucault, M.E. Pommerolle, E. Smith, E. Viret, «Géopolitique de la nostalgie», *Libération* (France), 14 août 2007; M. Diouf, «Pourquoi Sarkozy se donne-t-il le droit de nous tracer et de juger nos pratiques», *Sud Quotidien* (Dakar), 17 août 2007; N. et S. Kourouma, «En mémoire de notre père» et B. Giraud, «Les tribulations sarkoziennes en Afrique et l'histoire à l'école», *Libération* (France), 20 août 2007; P. Bernard, «Le faux pas africain de Sarkozy», *Le Monde* (France), 23 août 2007; Anne-Cécile Robert, «L'Afrique au kâcher», *Le monde diplomatique* (France), septembre 2007, p.32 (「サルコジのアフリカとんでも演説」清水眞理子訳、『ル・モンド・ディプロマティーク 日本語・電子版』二〇〇七年九月号)；J.-P.

Chrétien «Le discours de Dakar. Le poids idéologique d'un africanisme traditionnel», *Esprit* (France), novembre 2007, pp.163-181.

* 3 サルロジの演説原稿の別バージョンは次のウェブサイトに入手可能。 <http://www.africacom/index.php?page=content&art=1841&PHPSID=044c45260248abddc803752c41a52cf> (二〇〇八年一〇月二〇日)

* 4 たんば M. Gassama, «Le piège infernal» (Gassama 2008: 33-36)。また、フランスの著名な作家であり文化人であるベルナール・アンリ・レヴィは、二〇〇七年一〇月九日にラジオで放送されたフランス・アンテール局の番組内で、ダカールの演説を起草したゲノは人種主義者であると批判している (<http://www.lde-toulon.net/spip.php?article2310>) (二〇〇八年一〇月二〇日)。

* 5 フランスで定評のある学術専門誌である『ポリティク・アフリケーズ』は、同誌第一〇七号の巻頭に編集部名でサルロジの演説に関する論考を掲載した。

* 6 Loi N°2001-434 du 21 mai 2001 tendant à la reconnaissance de la traite et de l'esclavage en tant que crime contre l'humanité. 通称となったトビラとは、この法律の提唱者であり制定に中心的な役割を果たした仏領ギアナ出身のフランス国民会議員、クリスティアンス・トビラッドランノン (Christiane Taubira-Delanon) に由来している。さらにこのトビラ法に当たって、奴隷貿易および奴隷制の記憶を後世に伝えるための「奴隷制の記憶のための委員会 (le Comité pour la Mémoire de l'Esclavage)」が創設され、二〇〇六年

より五月一〇日がフランスで「奴隷貿易、奴隷制とその廃止の記憶記念日」となっている。

* 7 Durban Declaration and Programme of Action (<http://www.unhcr.ch/pdf/Durban.pdf>) (二〇〇八年一二月二〇日)

* 8 Loi N°2005-158 du 23 février 2005 portant reconnaissance de la Nation et contribution nationale en faveur des Français rapatriés.

* 9 Cité de Yves Gounin, «De la Francaphrique à l'Eurafricque: les débats nés du discours de Nicolas Sarkozy à Dakar», *Questions internationales*, n.°33, septembre-octobre 2008, p.39. サルロジによる「懺悔」への批判は、二〇〇七年五月一〇日の「奴隷貿易、奴隷制とその廃止の記憶記念日」に出席した際にも繰り返し発言された (*Le Monde*, 10 mai 2007)。

* 10 クレティアンは「アフリカ人のアイデンティティは、神秘主義や宗教心、感性からつくられる (identité africaine faite de mystique, de religiosité, de sensibilité)」との引用も掲載しているが、本稿で参照した演説原稿には一致する箇所をみいだすことができなかった。演説原稿では、「アフリカの若者たちよ、あなた方を根無し草にしようとする人々、あなた方のアイデンティティを剥奪しようとする人々、アフリカ的であること、つまりアフリカの神秘的なことをすべてを、アフリカの信仰のすべてを、アフリカの感性のすべてを、アフリカの精神構造のすべてを」一掃しようとする人々の言うことを聞いてはならぬ (N'écoutez pas, jeunes d'Afrique, ceux qui veulent vous déraciner, vous priver de votre identité, faire de table rase de tout de ce qui est africain, de tout

la mystique, le religiosité, la sensibilité, la mentalité africaine)」と記されている。

*11 協会のメンバーにはミラボー、グレゴワール神父、ラファイエットなどがいた。

*12 フランサフリックに関しては、たとえばグザビエ・ヴェルシャープなどによってスキヤンダルと同義語として用いられてきた経緯がある。本稿では、そのようなスキヤンダルの同義語としてのフランサフリックを使用することは、フランサフリック本来の意味合いから逸脱させることになると考える。フランサフリックに関しては、加茂省三「フランス領アフリカ独立期の再考——フランサフリックの視点から——」

『人間学研究』六号、名城大学、二〇〇八年十二月を参照。

*13 ムベキからサルコジに宛てた親書は当初非公開であったが、親書に対するサルコジの返書がフランス大統領府のウェブサイトに先に掲載され公開されたことから、親書の内容に関して憶測がなされ、サルコジ演説を肯定したとの批判がムベキに対して起こっていった。そこで南アフリカ大統領府は二〇〇七年八月二四日付けで声明を发出し、ムベキ大統領が賞賛したのは、演説におけるアフリカ・ルネサンスとアフリカの開発に関する箇所だけであるとし、批判を打ち消そうとした。その後親書がウェブサイト (<http://www.africafutures.com>) に掲載された (<http://www.lhd-toulon.net/spip.php?article2217>)。

*14 演説の全文はフランス大統領府ウェブサイトよりダウンロード可能 (http://www.elysee.fr/documents/index.php?mode=cview&cat_id=7&press_id=1106&lang=fr)

(二〇〇八年十二月二〇日)。

*15 ボケルの更迭に関しては、ボケルのフランサフリックに対する立場を好ましく思っていないガボンのボンゴ大統領やコンゴ共和国のサッス・ンゲンからの圧力があったとの報道がなわれている (*Le Figaro*, 20 mars 2008; *L'Express*, 19 mars 2008)。

●参考文献

- ヘーゲル (1994) 『歴史哲学講義 (上)』長谷川宏訳、岩波文庫。
Bayart, Jean-François (2008) Y a pas rupture, patron. J.-P. Chretien (ed), *L'Afrique de Sarkozy: un déni d'histoire*. Paris: Khartala, pp.31-34.
Chrétien, Jean-Pierre (2008), Introduction: par delà un discours présidentiel. J.-P. Chrétien (ed), *L'Afrique de Sarkozy: un déni d'histoire*. Paris: Khartala, pp.7-30.
Gassama, Makily (ed) (2008) *L'Afrique répond à Sarkozy*. Lorrain: Philippe Rey.
Hugo, Victor (1926) Discours sur l'Afrique. *Oeuvres complètes de Victor Hugo, Actes et paroles IV, Depuis l'exile 1876-1885*. Paris: Société d'éditions littéraires et artistiques, pp.121-129.
Manceron, Gille (2006) 1885: le tournant colonial de la République. Paris: La Découverte.
Mbembe, Achille (2008) L'Intrassable puits aux fantômes. J.-P. Chrétien (ed), *L'Afrique de Sarkozy: un déni d'histoire*. Paris: Khartala, pp.91-132.
Politique africaine (2007) Le Mépris souverain. *Politique africaine*

107: 5-8.

Smith, Stephan (2003) *Nérophologie: Pourquoi l'Afrique meurt*. Paris: Calmann-lévy.

Toraoré, Animata (2008) *L'Afrique humiliée*. Paris: Fayard.

(かも・しょうぞう／名城大学人間学部)